

柴田悦子編著『国際物流の経済学』

荒木智種

(日本医科大学)

本書は国際物流の社会における人間と人間のなかにおける国際物流の社会の両側面から、広範囲におよぶ国際物流経済をメインとした有効な理論を試み生みだそうとしている興味深い書である。

まず“物流”というテーマの中で、私たちにとって極めて身近で、かつ代表的な問題の一つは税関手続であろう。近年の通関手続は、わが国の産業界および諸外国からの要請で、コンピューターの導入などにより簡素化が進展しているものの、まだ「先進諸国からみると、日本の通関手続は気が遠くなるほど煩雑だ」と輸入業者のなかには指摘する人もいる。こうした声は、単的にいえば税関および衛生チェックなどを官轄する官庁の違いやら担当官が変わる点が指摘されている。また保税倉庫を十日以上使うと割増料金がかかる、といった問題に対応するだけで解決される問題ではない。通関手続の効率の低さは、コストを押し上げるだけでなく、安い海外食品等を締め出す障壁にもなる。

こうした問題を解くカギは、流通システムの効率化の確立、すなわち物流の明確化を明らかに示すことであろう。

従来、モノの輸送に際して不可欠と考えられていた“距離の克服”についても、近年における貨物輸送は、単一の輸送機関だけを問題にするのではなく、複数以上の交通機関を組み合わせることによって、貨物そのものを荷主の要請に添った輸送サービスが求められるようになった。いわゆる複合一貫輸送である。さらに、これが国際物流となると、従来のタテ割り分野別の貨物輸送における物流の概念では対応しきれなくなり、総合的視点にたった運輸機関の分析など、国際複合一貫輸送に関する研究・分析が必要になった。

ソ連・東欧の社会主義経済の衰退で、市場経済の勝利がプロパゲートされ、さらにECの市場統合によるブロック経済の到来、アジアにおける香港の中国返還など、各国をめぐる複雑な経済・社会情勢が、国際物流の流れを変貌しようとしている時機に、三年がかりで、今日の国際物流の持つ意味と果たす役割を明確にしようという共通の問題意識を持ったメンバーである「国際物流研究会」により共同研究を重ねられ、国際物流についての広範囲にわたる研究成果として、本書を上梓されたことは誠に時宜にかなっているといえる。

本書は、物流の概念にはじまり、国際物流における経済分析、通関、輸入食糧、港湾管理の現状分析にいたるまで、国際物流に関しての実態と将来展望について、広域にわたって研究・分析されており、関係者にとっては必読の書である。ぜひ一読をお

すすめたい。

本書の構成内容については、次の通りである。

第一章 国際物流と運輸業

運輸業の立場から国際物流を分析。国際複合一貫輸送におけるCarrier、ターミナル、貨物取扱人などのそれぞれの役割と位置づけ。

第二章 国際物流の経済的分析

同研究会のメインとなる研究部分で、日本企業の海外進出の現状。ボーダレスの活動を展開する企業と物流関係者が、他方ではナショナリズムに依拠せざるをえない矛盾した関係の分析。さらに生活者、労働者の視点からとらえた国際物流の検討。

第三章 国際複合輸送の構造と形態

国際複合一貫輸送の構造と形態を海運、ターミナル、Sea&Air、トラックの四部門に分け、各分野における現状と問題点を明らかにする努力をされている。

第四章 多国籍企業の国際物流戦略

—電機メーカーの事例を中心に—

第五章 日本産業の多国籍化と国際物流の新展開

—自動車メーカーの事例を中心に—

なお、第四章および第五章は多国籍企業の例からの国際物流戦略の分析。わが国の多国籍企業の代表といえる、電機メーカーと自動車メーカーを取り上げ、国際物流の主導者である企業戦略を紹介し、分析している。

第六章 国際物流における情報化

急速なテンポで進む情報化と国際物流の関係についての分析。日進月歩で変化していく情報システム化が、いかに国際物流をリードし、不可欠な存在として位置づけられるかを検討している。

第七章 通関における「規制緩和」

第八章 規制緩和・「自由化」と輸入食糧

第七章および第八章は、国際物流をめぐる規制緩和の問題である。第七章は通関、第八章は食糧輸入の問題について、税関の業務担当者が専門的立場から執筆されている。

補章 物流基盤整備と港湾管理者—大阪港の例証—

大阪港を物流基盤整備の視点から取り上げたものである。

熾烈な企業間競争によって、今日の繁栄を築き上げてきた日本企業は、多国籍企業の増大、国際複合一貫輸送の進展により、今後ますます発展を続けていくであろうが、これからの国際社会の中で成長していくためには、企業の道徳・倫理のコミュニケーション認識はもとより、世界の国々の人びとの信頼をいかにかけ得、共存をはかるかという知恵と有効な理論を身につけていくことが重要になってくるであろう。

独立戦争を闘っていたオランダで、武器弾薬を敵方スペインに売ってとがめられた、アムステルダム商人ベイラントは、貿易は自由でなければならない。利益を得るためなら、地獄にでも航海するとうそぶいた、という。「ベイラントの自由」とは、道徳・倫理の裏打ちのないただ身勝手な、自由を口実にした恥知らずな金もうけにすぎない。

自由市場経済は、双方コミュニケーション機能を大前提として企業、個人が公正なルールの下で、自由かつ達に競争する場でなければならない。

一方、国際物流の問題がクローズ・アップされるなかで、わが国における物流が産業界の要請を受けて、運輸政策の一環として取り上げられ、近年の物流革新に果たした役割は大きいといえる。

しかし、通関を例にとってみると、国際物流の進展に比例して改善をはかっていかなければならない問題が山積しているようである。行政側が許認可権限の綱引きを繰り返しては、国際社会の急激な動きに遅れをとるのではないかと懸念される。

本書の研究成果や提言が反映されるような行政システムの構築に期待したい。

（編成山堂書店発行　5判・232頁　定価2,800円、送料360円）